

コール・アン

Chor En

第11回 演奏会

2026年 5月 9日 [日]

中川文化センター大ホール

開場 13:30　開演 14:00

ごあいさつ

本日は、コール・アン第11回演奏会にご来場頂きまして誠にありがとうございます。
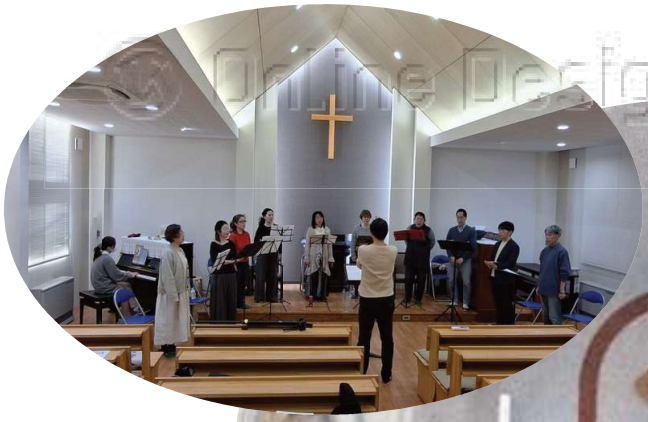
第10回演奏会が終了した後、何人かの団員がそれぞれの都合で退団を致しました。その結果、パートが全部そろわない状況で今回の演奏会のための練習が積まれて来ました。それでもその間の練習はいつも通りとても楽しく充実した練習でした。昨年の後半に少しずつメンバーも増えなんとか演奏会の開催に条件がそろいつつありました。そんな折、めでたくメンバーの出産の予定が立ち、神様からコンサートを開催しなさいと命が下ったのです。

演奏会開催に際しまして、いつも大変な思いで準備を頂く花岡音楽監督、伊東、何原両先生、会場をお貸し頂く日本イエスキリスト教団岡谷教会、カトリック伊那教会、その他会場の関係者の皆様に感謝申し上げます。

今日は、そんな私達コール・アンの練習の成果をお聴き下さい。

コール・アン 代表
木下 勝敏

Online Design Sample Image





Facebookにて、普段の練習風景などをお届けしています。
https://m.facebook.com/profile.php?id=100064878362812

Conductor　花岡 由裕 はなおか よしひろ / 指揮者　コール・アン音楽監督



2002 年に国際基督教大学教養学部人文科学科を卒業後、2003 年に渡米しニューヨークのマネス音楽院に入学。在学中に Cantori New York、New York Men's Choir 等を指揮。
2007 年には同音楽院合唱指揮科修士課程を修了し、帰国。帰国後 2008 年、2009 年には東京混声合唱団を指揮。2017 年、ICU OGC 合唱団とプロフェッショナルズ・オーケストラによるハイドン作曲「天地創造」を指揮した。2019 年にはウクライナ、チェルニーヒフフィルハーモニー主催の指揮マスタークラスにて、最優秀指揮者賞である「ニコライ・バセーリビッチ賞」を受賞。
現在、長野県、東京都、埼玉県を中心に合唱団宙、男声合唱団シルキーナイツ、学習院大学輔仁会音楽部大学女声合唱団、アンサンブル・コンコルディア等10団体余の常任・客演指揮を務めている。
指揮法を大谷研二、マーク・シャピロ、永峰大輔、大山平一郎、髙谷光信、ニコライ・バセーリビッチ、本山秀毅、曽我大介各氏に、音楽史と音楽理論を金澤正剛、伊東辰彦両氏に師事。

何原 弥生 いずはら やよい / ピアニスト



昭和音楽大学音楽学部器楽学科ピアノ指導者コース卒業。在学中に学内演奏会、ピアノ8時間コンサート、ヴィンチェンツォ・アウディーノ演奏会に出演。卒業後は、長野県新人演奏会、Amor son grataコンサートの企画・出演、母の日に贈るコンサート、コンサート ア・ラ・カルトなどに出演。
ピアノを太田恭子、関川有紀、山辺のり子、ヴィンチェンツォ・アウディーノ、奥村晃博に師事。編曲を樋口真千子に師事。カワイアレンジコンテストにて入賞。リトミック指導　ディプロマ取得。
現在、豊丘村にてピアノ・リトミック・ソルフェージュの指導を行いながら、オペラ・合唱の伴奏を中学生から高齢者グループまで多方面で務めている。
ピアノde脳活講師。

Pianists

伊東 美紀 いとう みのり / ピアニスト



富士見町出身。5歳よりピアノを、11歳よりフルートを始める。桐朋学園大学音楽学部音楽学科管楽器専攻を卒業、同大学研究生修了。在学中、第14回別府アルゲリッチ音楽祭、三善晃先生追悼コンサートなどに桐朋学園オーケストラ首席奏者として出演。
第40回フルートデビューリサイタル、第34回松本市音楽文化ホール新人演奏会、長野県新人演奏会に出演。第4回 FUGA 国際音楽コンクール・ゴールドプライズコンサートにて金賞、管楽器部門スープリームを受賞。第32回かながわ音楽コンクールフルート部門一般の部第3位。 第12回仙台フルートコンクール一般部門第2位。これまでに、フルートを飯島和久、神田寛明、小池郁江各氏、ピアノを飯島文子、長田美歩、小林里絵、茅野瑞穂、廻由美子各氏、フラウト・トラヴェルソを有田正広氏、声楽を秋山恵美子、落合美和子、友清崇各氏に師事。現在、自宅音楽教室を中心にフルート、ピアノ、ソルフェージュ等の指導にあたる他、フルート、ピアノ伴奏での演奏活動も積極的に行っている。
らぼ音楽事務所所属。音工房りん主宰。桐朋学園大学附属「子供のための音楽教室」諏訪教室非常勤講師。

PROGRAMMA

Parte Prima

教会音楽の父と子供たち

～パレストリーナとイタリアの作曲家～

1. Ave Maria	PALESTRINA, Giovanni Pierluigi da
2. Salve Regina	ALLEGRI, Gregorio
3. O Refrigerio	PALESTRINA, Giovanni Pierluigi da
4. Donna se m'ancidete	GESUALDO da Venosa
5. Canite Tuba - Rorate Cœli	PALESTRINA, Giovanni Pierluigi da
6. Crucifixus	LOTTI, Antonio
7. Missa Tertia より	PALESTRINA, Giovanni Pierluigi da
Sanctus - Hosanna I	
8. O Magnum Mysterium	GABRIELI, Andrea

—— 休 憩 ——

© Online Design Sample Image

Parte Seconda

イタリア・バロックの巨匠とその名曲

～ヴィヴァルディ・D.スカルラッティ・モンテヴェルディ～

1. Gloria より	VIVALDI, Antonio
Ⅰ. Gloria in Excelsis	
Ⅶ. Domine Fili Unigenite	
Ⅻ. Cum Sancto Spiritu	
2. Stabat Mater より	SCARLATTI, Domenico
Ⅰ. Stabat Mater Dolorosa	
Ⅱ. Sancta Mater Istud Agas	
Ⅲ. Amen	
3. Vespro della Beata Vergine より	MONTEVERDI, Claudio
Ⅸ. Ave Maris Stella	
Ⅺ. Magnificat	
Sicut Locutus - Gloria Patri - Sicut Erat	

《 楽曲解説 》

コール・アン音楽監督　　花岡 由裕

Parte Prima

教会音楽の父と子供たち

～ パレストリーナとイタリアの作曲家 ～

第１ステージは**『教会音楽の父と子供たち』**と題して16世紀、ルネサンス時代のイタリアを代表する作曲家パレストリーナと、彼の音楽を模範!?としつつ独自の音楽の世界を切り開いていったパレストリーナ以後の４人のイタリアの作曲家をとりあげます。『イタリアの』と言いましたが、16世紀から18世紀前半のイタリアは分裂と外国支配の時期が続き、政治的・軍事的に分裂した「混迷の時代」でした。政治的に統一された国家として最初に『イタリア』の名が使用されたのは、ナポレオン支配時代のイタリア共和国 （1802年-1805年） で現在のイタリアにあたる国の成立は1861年のサヴォイア家による統一を待たなければなりません。一方で、イタリア・ルネサンス期はレオナルド・ダ・ヴィンチやミケランジェロ、ラファエロ等の芸術を大成させた文化黄金期でもあり、当時の音楽において叡智を極めたのが **Giovanni Pierluigi da Palestrina（パレストリーナ 1525年? - 1594年）** でした。出生年が定かではないものの、昨年2025年には生誕500年をお祝いするイベントや公演がイタリアのみならず世界各地で開催されました。彼の作品に見られる、順次進行を主体とした簡素・平穏・緻密な合唱様式はパレストリーナ様式と称されて、宗教音楽作品の規範とされてきました。

カトリックの宗教曲を多く遺し、「教会音楽の父」とも呼ばれるパレストリーナの作品を本ステージの１、３、５、７曲目に、彼より後の時代にイタリアで活躍した言わばパレストリーナの子供達の作品を２、４、６、８曲目に配しました。パレストリーナと４人の作曲家の作品を交互に演奏・鑑賞することによって、それぞれの音楽の独自性や相違性などを発見することのできるような、皆様にとって興味深いステージになると嬉しく思います。

“Ave Maria”（めでたしマリア）は６世紀～７世紀に成立した代表的な聖母賛歌で、多くの作曲家達によって名曲が作られてきました。パレストリーナは少なくとも５曲の "Ave Maria" を作曲していて、どの作品も気品溢れる優雅さを兼ね備えた作品となっています。今回我々が演奏するのは同名のグレゴリオ聖歌の旋律線を基礎としたパロディ技法（既存の楽曲のメロディを引用し新たな作品を生み出す手法）が巧みに使われた５声部の作品で、テキストの変化に沿って音楽が多彩に変化します。厳かな宗教曲の中に宿る情熱的な信仰心が感じられる名曲です。

Gregorio Allegri（アレグリ 1582-1652）はヴァティカン宮殿内にある教皇の礼拝堂であるシスティーナ礼拝堂門外不出の秘曲、二重合唱のための「ミゼレーレ」の作者として名が知られていて、かのモーツァルトが２度聴いただけで完全に複写したという伝説が残っています。生涯の大半をローマで過ごしたアレグリは宗教曲の他、弦楽合奏のための作品を残した初期の作曲家の１人でもありました。**“Salve Regina”（栄えあれ聖なる女王）**は聖母マリアのための４つのアンティフォナ（交唱-２組の歌い手が対話するように、節を交互に歌う形式）の１つで、彼のア・カペラ曲がパレストリーナの様式を更に簡素化したような手法で書かれているのに対し、この曲はイタリア初期バロック音楽の影響を受けて通奏低音によるコンチェルタート様式（通奏低音の上で、声楽グループが１つの旋律を共有して交互に歌う）によって作曲されています。通奏低音の上に幾重にも絡まる旋律線が多元的な音楽空間の拡がりを創り出しているかのようです。

宗教曲作曲家と見なされている（そう信じられている）パレストリーナですが、実は世俗曲であるマドリガーレも 100 曲以上遺しています。生前、世俗的なテキストに曲を付けたマドリガーレ集２冊の他に、崇高なテキストに曲を付けた宗教マドリガーレの曲集も２冊出版されました。

“O Refrigerio”（おお、我らを回復させる炎）は後者の信徒会・オラトリオ会などの民間宗教団体集会において、また対抗宗教改革支持者に好まれ演奏されることを目的とした宗教マドリガーレで、世俗マドリガーレと比較すると感情表現の抽出が抑えられ、音楽全体や旋律の均整美がとれた彼の宗教曲の特徴が良く表れています。

パレストリーナよりも少し後の時代、南イタリアのヴェノーザ公国の君主でもあった **Carlo Gesualdo（ジェズアルド 1566?-1613）**の作品は激しい情感表現に富んでいます。半音階や不協和音の積極的使用による彼の音楽語法は 19 世紀以降にならないと再び現れることがなかったと評され、近代や 20 世紀以降の作曲家達にも大きな影響を与えました。本作品 **“Donna se m’ancidete”（女よ、もし私を殺すなら）**の歌詞は恐らく他の作品と同じようにジェズアルド本人によって作詞され、「愛」・「死」・「苦痛」といった激しい感情の起伏が自身の音楽によって増幅されています。３声のソプラノと、アルト、テノール、バスという偏った６声部編成の作品で高声部のパートが多いことによる緊密なサウンドが曲の抒情性を高めているように感じます。

多作であったパレストリーナは生涯何百曲もの作品を遺しました。特にモテット（多声部による宗教声楽曲）を 300 曲以上作曲しています。**“Canite Tuba”（ラッパを吹き鳴らせ）**は彼がヴァティカンのサン・ピエトロ大聖堂で働き始めた頃に作曲されました。曲の後半はクリスマス前にあたる待降節のアンティフォナ（交唱）である **“Rorate coeli”（天よ、露を降らせよ）**へと繋がっていきます。大聖堂の音響を活かすように曲が設計されていますが、交唱のスタイルでよくある二重合唱（複合唱）ではなく、５声部の声部の分け方に工夫がなされています。各場面のテキストの変化に伴ってサウンドを立体的に変化させて、救世主の到来を告げる荘厳な雰囲気を作り出しています。

パレストリーナが活躍した時代よりも 100 年以上後の 17 世紀、盛期バロック音楽から初期古典派音楽の橋渡しと言われる時代に活躍したのは **Antonio Lotti（ロッティ 1667-1740）**です。パレストリーナ様式に基づいたア・カペラの宗教合唱曲や歌曲など少数の作品で知られるだけでしたが、近年になってオペラや長大なミサ曲、レクイエムなどの録音によって作曲家としての再評価が進んでいます。「キリスト教とは何か」が語られるミサ通常文の Credo（信仰宣言）の中間部、キリストの受難の場面である **“Crucifixus”（十字架につけられ）**はロッティの作品では８声部の作品が有名ですが、今回演奏する６声部による作品も声部間に現れる係留音の２度のクラスターや不協音程同士の跳躍、不協和音の印象的な使用によって受難というドラマ性が十分に活かされた名曲と言って良いでしょう。

パレストリーナのミサ曲には、彼の作曲様式が長い年月をかけて発展してきた軌跡が刻まれていると言われます。バッハなど後世の作曲家達を魅了し多大な影響を与えました。ほとんどのミサ曲は 1554 年から 1601 年の間に印刷された 13 巻もの本に収められています。**“Missa Tertia”（第 3 のミサ曲）**は自身のモテット（宗教的小品）“O magnum mysterium"（おお大いなる神秘よ）を元に作られたパロディ・ミサ曲で前述のサン・ピエトロ大聖堂の空間を活かすようなハーモニーの積み重ねと展開が見事な作品です。今回我々が演奏するのはその中の **“Sanctus - Hosanna"（聖なるかな – 主を讃えよ）**でミサ曲の元になったモテットの旋律線を使用しながら、ドラ

マティックな展開を作り出しています。Sanctus（聖なるかな）の前半、厳かな祈りによって始まった音楽は、Pleni sunt coeli et terra（天と地はあなたの栄光に満ちています）から活発な動きを伴った３声部となり、Hosanna（主を讃えよ）の華やかで高らかな歌唱によって昇華されていきます。

Giovanni Gabrieli（ガブリエーリ 1554?-1612）は当時のヨーロッパで最も影響力のあった作曲家の１人でした。卓越した音楽の長い伝統を持つサン・マルコ大寺院で活躍した彼はその構造（左右両陣の互いに向き合う聖歌隊席）と響きやエコー現象を活かしたコーリ・スペッツァーティ（複合唱）を発展させました。また楽器の活用、強弱法、通奏低音の使用等、ヨーロッパ各地にその作曲技法を広めていきました。

本作品**“O magnum mysterium”（おお、大いなる神秘よ）**は彼の作品の特徴である複合唱の対話によってキリスト降誕の秘跡が歌われます。家畜小屋で生まれたイエスへの驚嘆と敬愛、神秘性と偉大性が巨大ともいえる音の連なりと荘重な響きによって見事に表現されています。

《 歌詞対訳 》

1. Ave Maria
Giovanni Pierluigi da Palestrina

Ave Maria, gratia plena,
Dominus tecum,
benedicta tu in mulieribus,
et benedictus
fructus ventris tui Jesus.
Sancta Maria, regina coeli,
dulcis et pia,
o mater Dei,
ora pro nobis peccatoribus,
ut cum electis,
te videamus.

めでたし マリア
パレストリーナ

めでたしマリア、恵みに満ちた方、
主はあなたと共に
あなたは女の中で祝福され、
あなたの胎の実イエスも
祝福されています
聖なるマリア、天の元后、
優しく慈しみ深い方、
おお　神の母よ、
罪深い私たちのために祈ってください。
選ばれた者たちと共に、
あなたを見ることができますように

2. Salve Regina
Gregorio Allegri

Salve Regina, mater misericordiae;
Vita, dulcedo et spes nostra,
Ad te clamamus, exsules filii Evae.
Ad te suspiramus, gementes et flentes
in hac lacrimarum valle.
Eia ergo, advocata nostra
illos tuos misericordes oculos ad nos converte.
Et Jesum benedictum fructum ventris tui,
nobis post hoc exsilium ostende.
O clemens, o pia, o dulcis virgo Maria

栄えあれ、聖なる女王
アレグリ

栄えあれ、聖なる女王よ、あわれみの母よ
我らの人生、やさしさ、そして希望よ
あなたに向かって、追放された者たち、エヴァの子である我らは叫びます
涙の谷の底で嘆き、泣きながらため息をついています
さあ、我らの救世主よ、
あわれみのまなざしを我らにお向けください
そして、あなたの祝福された胎の実であるイエスを、
追放の日々が終わった後に我らにお見せください
おお、慈悲深い方、おお、敬虔な方、おお、甘美な乙女マリアよ

3. O refrigerio
Giovanni Pierluigi da Palestrina

O refrigerio acceso
D'un nutricante foco
O liev'e dolce peso
Affanno pien di gioco
Signor, vien, ch'io t'invoco
L'anima a te s'inchina
O sola medicina
Contra le piaghe del mortal furore

おお、我らを回復させる炎
パレストリーナ

おお、滋養豊かな火が灯した
我らを回復させる炎
おお、喜びで満たされた苦悩は
軽やかで甘美な重荷
主よ、おいでください、私はあなたに呼びかける
この魂はあなたにひれ伏します
おお、激情という傷には
たったひとつの薬です

4. Donna se m'ancidete
Gesualdo da Venosa

Donna, se m'ancidete
La mia vita sarete,
N`e sperate gi`a pi`u ch'io chieggi aita.
Se amara `e la mia vita,
Dolce sia la mia morte.
Cosi, cangiando sorte,
La mia vita sarete,
Donna, se m'ancidete

女よ、もし私を殺すなら
ジェズアルド

女よ、もし私を殺すなら、
あなたは私の命となるでしょう
もう私が助けを求めることもないでしょう
もし私の人生が苦いものなら、
私の死は甘いものであってほしい
そうして運命を変えて、
あなたは私の命となるでしょう
女よ、もし私を殺すなら

5. Canite tuba – Rorate Coeli
Giovanni Pierluigi da Palestrina

Canite tuba in Sion,
quia prope est dies Domini.
Ecce veniet ad salvandum nos.
Erunt prava in directa,
et aspera in vias planas.
Veni Domine et noli tardare.

Rorate coeli desuper,
et nubes pluant justum:
aperiatur terra et germinet Salvatorem.
Ostende nobis, Domine, misericordiam tuam,
et salutare tuum da nobis:
veni Domine, et noli tardare.
Alleluia.

Isaiah 45:8, Ps. 85:8

ラッパを吹き鳴らせ - 天よ、露を降らせ
パレストリーナ

シオンでラッパを吹き鳴らせ
主の日が近づいているからだ
見よ、主は我らを救うために来られる
曲がった所はまっすぐに、
険しい道は平らな道となる
主よ、来てください、遅れることなく

天よ、露を降らせよ
雲よ、正義を注げ
地が開いて救いが実を結ぶように
主よ、我らに憐れみを示し、
救いを与えたまえ
主よ、来てください、遅れることなく
アレルヤ

イザヤ書 45:8, 詩篇 85:8

6. Crucifixus
Antonio Lotti

Crucifixus etiam pro nobis, sub Pontio Pilato;

passus et sepultus et sepultus est.

十字架につけられ
ロッティ

(イエス・キリストは)ポンテオ・ピラトのもとで、
われらのために十字架につけられた。
苦しみを受け、そして葬られた

7. Sanctus – Hosanna I
from《 Missa Tertia 》
Giovanni Pierluigi da Palestrina

Sanctus, Sanctus, Sanctus
Dominus Deus Sabaoth.
Pleni sunt caeli et terra gloria tua.

Hosanna in excelsis Deo.

聖なるかな – 主を讃えよ 1
『第３のミサ曲』より
パレストリーナ

聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな
万軍の神なる主よ
天と地はあなたの栄光に満ちています

主を讃えよ　いと高きところに

8. O Magnum Mysterium
Andrea Gabrieli

O magnum mysterium,
et admirabile sacramentum
ut animalia viderent Dominum natum,
jacentem in praesepio,
Beata Virgo,
cujus viscera meruerunt
Portare Dominum Christum.
Alleluia

おお、大いなる神秘よ
ガブリエリ

おお、大いなる神秘よ
また賞賛すべき秘跡よ
動物たちは生まれたばかりの
飼い葉桶に横たわる主を見るだろう
おお、幸いなる乙女よ
その胎は
主イエスキリストを宿すに値する
アレルヤ

Parte Seconda

イタリア・バロックの巨匠とその名曲

～ヴィヴァルディ・D.スカルラッティ・モンテヴェルディ～

演奏会の後半、第２ステージは**『イタリア・バロックの巨匠とその名曲』**と題して、17 世紀のイタリアで活躍し、新しい時代を切り拓いたヴィヴァルディ、ドメニコ・スカルラッティ、モンテヴェルディの作品を演奏いたします。第１ステージで演奏したパレストリーナの均整と調和がとれた優美な音楽に対して、明暗の対比が強い、感情に訴える劇的な表現の音楽が時代を席巻していきました。

Antonio Vivaldi（ヴィヴァルディ 1678-1741）は、地中海の入り口に位置し中世からルネサンス期にかけて海洋貿易で栄えた北イタリアのヴェネツィア共和国で生まれ、作曲家・ヴァイオリン奏者として活躍しました。またローマ･カトリック教会の司祭でもあった彼はその髪の色から「赤毛の司祭」と呼ばれていたそうです。普通、司祭等の聖職者が作曲する音楽の分野は彼らの生活基盤と活動の場により教会音楽が大半ですが、ヴィヴァルディは例外的な存在で、教会音楽より一般の音楽分野の作品数の方が多い作曲家でした。中でもヴァイオリン協奏曲集『和声と創意の試み』 作品８、 第１曲～第４曲の「四季」などの協奏曲は 500 以上を数える彼の代表的なジャンルです。

作品の多くが、音楽教師を務めたピエタ慈善院（経済的な事情などで親が手放した赤子を引き取って育てる施設）の生徒達、優れた音楽家たちのために作られました。彼女たち（彼ら）の合唱や器楽の演奏水準は非常に高く、同院の主催する音楽会はヴェネツィアの定期刊行物で紹介され、地元の人々や当地を訪れた観光客、音楽通の人々でにぎわっていたと言われています。

ヴィヴァルディの教会音楽は、ミサ曲、モテット、オラトリオ、カンタータなど多岐に及びます。彼は 30 才頃から前述のピエタ慈善院のためにこうした声楽を伴う教会音楽作品を手掛け始めました。

その中の代表的な作品が今回演奏する**“Gloria"（栄光の讃歌）ニ長調**で、ヴィヴァルディの宗教作品の中では特に有名で演奏頻度が高い作品です。全 12 曲から成り、協奏曲の確立者ヴィヴァルディらしい総奏(Tutti)と独奏(Solo)との組み合わせを巧みに用いて全体を構成しています。強弱や表情のコントラスト、強弱や速度の急緩や編成の変化など、躍動的で巧みなバロック建築を思わせる絢爛さに満ちています。今回はその中から活発なアレグロで始まる有名なテーマを含む第１曲**“Gloria in excelsis Deo"（いと高きところには神の栄光）**、騎馬のリズムに乗って明暗の対比が華やかに歌われる第７曲**“Domine, Fili unigenite”（主なるひとり子）**、
同時代に活躍した作曲家 G.M.ルッジェーリによる “Gloria"（1708）から最後の部分を転用した、喜びに満ちた終曲である第 12 曲**“Cum Sancto Spiritu”（聖霊とともに）**の３曲をお送りいたします。

バロック期のイタリアで名を馳せた作曲家の１人、アレッサンドロ・スカルラッティの子として生まれたのが**Giuseppe Domenico Scarlatti（ドメニコ・スカルラッティ 1685 - 1757）**です。バッハやヘンデルと同年に生まれた彼は、色彩豊かな鍵盤語法が繰り広げられる 550 余りもの鍵盤楽器のための作品群によって知られていますが、肖像画と断定できる画が無かったり、自筆譜や自筆の手紙が残っていない等、謎の多い作曲家でもあります。後世の鍵盤楽器の作曲家として特に有名なショパンは、晩年に「もし聴衆の無理解さえなければ、スカルラッティの作品だけで公開演奏会を催したい」と語っています。

“Stabat Mater"（悲しみの聖母）は、13 世紀のフランシスコ会で生まれたカトリック教会の聖歌です。中世ヨーロッパの詩の中でも極めて心を打つものとされ、わが子イエスが磔刑に処された際、十字架の傍らに立っていた母マリアが受けた悲しみが歌われます。中世以来多くの作曲家がこの詩に曲を付けていて、中でもペルゴレージの作品は多くの人に知られている名曲です。

ドメニコ・スカルラッティ作品では珍しい宗教声楽曲である本曲も上記の作品に劣らない、白眉ともいえる宗教曲の名作です。全 10 曲からなる曲のうち今回我々が演奏するのは **1. “Stabat Mater”（悲しみの聖母）、5. “Sancta Mater, istud agas"（聖なる母よ、どうかお願いします）、10. “Amen”（アーメン）**の３曲です。４声のソプラノ、２声のアルト、２声のテノール、２声のバスによる 10 声部の合唱とバッソ・コンティヌオによる特徴的な編成や、ある種独特ともいえる和音構成音の配置バランスによって、聖母マリアの不安定で揺れ動く心情が醸し出されています。彼の鍵盤楽器のための作品を思わせるような細かいパッセージと自由で律動的なリズム、不自然とも思える唐突な音程への跳躍やヘミオラ（変形拍子：２拍子の中に３拍子が混ざる等）の使用による緊迫感の抽出など魅力的な音楽の要素が詰めこまれています。

Claudio Giovanni Antonio Monteverdi（モンテヴェルディ 1567？-1643）はイタリアの音楽界で重要なポストとされていたマントヴァ公国の宮廷楽長やヴェネツィアのサン・マルコ寺院の楽長を歴任し、ヴェネツィア音楽のもっとも華やかな時代を作り上げました。その作品はルネサンス音楽からバロック音楽への過渡期にあると位置づけられています。それまでの音楽では不可能であった、より大きな感情の起伏を表現しようと音楽の様式に変革をもたらした『改革者』とも呼ばれるモンテヴェルディは、オペラ最初期の作品の１つで今世紀でも頻繁に演奏される『オルフェオ』を作曲したことによってもその名を知られています。

今回演奏する**“Vespro della Beata Virgine "（聖母マリアの夕べの祈り）**はバロックに分類される時代区分中、最初期の 1610 年に作曲されました。当時としては異例とも言える大作で出版譜に書かれた音楽の規模が非常に大きく、全曲演奏すると１時間半ほどかかるために、１回の礼拝ですべて演奏することを目的としていたかどうかについては意見が分かれています。オーケストラのみならずソロや合唱の歌手たちにも高度な技術が求められるので、なかなか演奏される機会もありませんが、今回はその難曲に挑戦したいと思います。

“Ave Maris Stella"（めでたし、海の星）は、聖母マリアを讃えるイムヌス（讃歌）でその起源は少なくとも８世紀頃に遡ると言われます。「海の星」とはカトリック教会の伝統ではマリア様のことを指していますが、この星は地中海東岸より見た西の海に輝く星である宵の明星（金星）とする説があります。『聖母マリアの夕べの祈り』では全曲の後半に位置されていて、合唱―重唱―ソロ―楽器による演奏がシンメトリー（左右対称）に近い構造になっている美しい作品群です。

演奏会の最後を飾るのは『聖母マリアの夕べの祈り』のクライマックス、**“Magnificat”（我が魂は主をあがめ）**の終結部分にあたる**“Sicut locutus"（彼が語った通り）- “Gloria Patri"（父に栄光あれ）- “Sicut erat"（初めと同じように）**の３曲です。女声の強烈なユニゾンに始まり、テノール（アルト）による技巧的で繊細なソリストとソプラノによる天使の合唱、そして壮大で神々しいほどの大合唱のエンディングを、どうぞお楽しみ下さい。

《 歌詞対訳 》

Gloria

Antonio Vivaldi

Ⅰ.

Gloria in excelsis Deo.

Ⅶ.

Domine Fili unigenite, Jesu Christe.

Ⅻ.

Cum Sancto Spiritu,
in gloria Dei Patris.
Amen.

グローリア（栄光の賛歌）より

ヴィヴァルディ

第１曲

いと高きところでは、神に栄光がありますように

第７曲

主なる独り子、イエス・キリストよ

第12曲

聖霊とともに、
父なる神の栄光の中に
アーメン

Stabat Mater

Domenico Scarlatti

Ⅰ. Stabat Mater Dolorosa

Stabat Mater dolorosa
juxta crucem lacrimosa,
dum pendebat Filius.

Ⅱ. Sancta Mater, istud agas

Sancta Mater istud agas,
crucifixi fige plagas
cordi meo valide.
Tui nati vulnerati,
tam dignati pro me pati,
poenas mecum divide.

Ⅲ. Amen

Amen

悲しみの聖母 より

D. スカルラッティ

第１曲 悲しみの聖母は立っていた

悲しみの聖母は立っていた
十字架の傍に　涙にくれて
御子が架けられているその間

第２曲 聖なる母よ、どうかお願いします

聖なる母よ、どうかお願いします
十字架に架けられた御子の傷を
私の心に深く刻みつけてください
あなたの子が傷つけられ
ありがたくも私のために苦しんで下さった
その苦しみを私に分けてください

第３曲 アーメン

そのようにありますように

Vespro della Beata Vergine
(SV 206, 206a)

C. Monteverdi

聖母マリアの夕べの祈り より

モンテヴェルディ

IX. Ave Maris Stella

Ave Maris, stella
Dei Mater alma,
Atque semper virgo,
Felix coeli porta.

第９曲 『めでたし、海の星』

めでたし、海の星
あなたは慈しみ深い神の母
そして永遠の乙女
幸運な天国の門です

XI. Magnificat II
Sicut Locutus
- Gloria Patri
- Sicut Erat

Sicut loctus est patres nostros
Abraham et semini eius in seacula.

Gloria Patri, et Filio, et Spiritui Sancto.

Sicut erat in principio,
et nunc, et semper,
et in saecula saeculorum.
Amen.

第 11 曲 『我が魂は主をあがめ その２』より
彼が語った通り
- 父に栄光あれ
- 初めと同じく

彼が私たちの父祖アブラハムと
その子孫に永遠に語ったとおりです

父と子と聖霊に栄光あれ

初めと同じように、
今も、これからも、
世々に限りなく
アーメン

Chor En Member's Profile

岡﨑 智子　おかざき さとこ
国立音楽大学卒業　高森町在住
最近は1年間の流れを覚えたころに異動です。昨年度は機織りと紙すきに明け暮れ、音楽とのつながりはこの団だけでした。今この一瞬が奇跡の連続なのだといつも思い知らされるのに、歳のせいもありすぐ忘れてしまいます。縁あって集まったこのメンバーで、このプログラムを歌える喜びを忘れず、ハーモニーを紡ぎたいと思います。

笠松 陽子　かさまつ ようこ
飯田市在住。
大学から合唱団で活動し、仕事をしながら細々と歌ってきました。コール・アンに入団して数ヶ月です。こんなに早く発表の機会をいただけるとは思っていませんでした。メンバーについていけるように頑張ります。

勝又 麻由　かつまた まゆ
昭和音楽大学声楽学科卒業、飯田市在住。
コール・アンで歌い始めてもう6年が経っていることに驚き、長年自由な日曜日を過ごさせてくれる家族には感謝の気持ちでいっぱいです。
楽しく真面目に歌えるひとときを共有できる仲間に恵まれた幸せを噛みしめつつ、皆さまにも今日のひととき、音楽の歓びが届きますよう心を込めて歌います。

小林 佳子　こばやし よしこ
東京学芸大学混声合唱団にて在団時、伊藤栄一氏の指揮に感銘を受け、合唱の面白さと奥深さに魅了されました。その後、つくば古典音楽合唱団、数年のブランクを経て、コール・アンに参加。久しぶりの古典音楽に緊張しつつ、刺激的な週末を楽しんでいます。下諏訪町在住。

五味 活美　ごみ いくみ
歳と共に思い通りの声から遠ざかる現実に目を瞑り(耳を塞ぎ)、少しでも長くこのハーモニーに浸る幸せをと願う日々。
来年は花岡先生の帰国を待って結成した合唱団""宙(sola)""が20周年記念演奏会。茅野市でお待ちしております。

齋藤 舞美　さいとう まいみ
金城学院大学文学部音楽芸術学科卒業。飯田市在住。
小学校で子どもたちと「ああでもない、こうでもない」と言いながら音楽を楽しむ生活を送っています。最近は、自分の声と向き合ったり、音楽をじっくり鑑賞したりする時間も大切にするようになりました。
一緒に歌う仲間、支えてくださるすべての方への感謝を胸に、最後まで心を込めて歌います。

関口 紗知子　せきぐち さちこ
東京学芸大学初等教育教員養成課程音楽専修を経て、同大学院修士課程音楽教育専攻修了。
これまでの数年間は、木曽の谷や善光寺平など住まいを転々とし、毎回長距離ドライブからの練習でしたが、ようやく飯田市に腰を落ち着けました。
コール・アンのステージに乗るのは4回目。歌えること・音楽を追求できることは当たり前ではないのだなと日々実感しています。家族と仲間、先生方、支えてくださる皆様に感謝です。これからも音楽と共に在れますように。

Volume Design Sample Image

田中 淳子　たなか じゅんこ
国立音楽大学声楽学科卒業後、欧州でソリスト及びアンサンブルメンバーとして活躍ののち帰国。現在は飯田市を拠点に国内外で演奏活動を続けながら、後進の指導に当たっています。新たな仲間たちを迎えての第11回演奏会、従来メンバーが2年かかった曲を半年未満で補完してくれるという頼もしさに驚きと喜びを噛みしめながら、心を込めて演奏したいと思います。

林 あゆみ　はやし あゆみ
合唱経験は高校時代ぶりという初心者です。団員募集の広告と練習の様子を見て、私も歌いたい！と入団してしまいました。
皆さんのレベルについていこうと四苦八苦しながらも、久しぶりの音楽に触れる時間を楽しんで練習に参加しています。
飯田市千代在住。

松田 純子　まつだ じゅんこ
昨年末、団員募集の広告を見て練習見学。美しい響きに惹かれて入団してしまいました。歌う事から離れていた私が、皆様の響きの中に身を置きながら楽譜に向かって歌う事は懺悔のような、瞑想のような、、、
入団半年未満で本番！？に戸惑いながら支えてくださる皆様に感謝しつつ練習させていただいています。
信州大学教育学部音楽科卒、辰野町在住。

榎本 晃　えのもと あきら / ねずみどし
伊那市在住。
昨年前期高齢者にグレードアップし初孫にも恵まれ、ますます意気だけは軒高、高い音はゴメンナサイで合唱ライフを満喫しています。高遠やますそコーラスでも歌ってまちゅー。

木下 勝敏　きのした かつとし
帝京大学法学部法律学科卒業。
武蔵野合唱団に27年間在籍し、2013年コール・アンを立ち上げ現在に至る。
2024年8月23日、武蔵野合唱団第54回定期演奏会、松井慶太指揮日本フィルハーモニー交響楽団、ウォルトン作曲ベルシャザールの饗宴、ミューザ川崎シンフォニーホール、2025年5月7日、武蔵野合唱団第55回定期演奏会、小林研一郎指揮東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団、ヴェルディ作曲レクイエム、サントリーホールに双方共に特別の縁有って出演。
コール・アン代表、ISD個性心理学マスターインストラクター、キネシオロジーかばさん講座出席、守成クラブ諏訪湖世話人相談役、駒ケ根市在住。

工藤 弦　くどう げん
長野県上田市出身。伊那市在住。
大学時代から合唱を始め、鈴木茂明氏に師事。筑波大学混声合唱団・同大学男声合唱団メンネルコールにて学生指揮者を務める。
伊那弥生ケ丘高校地歴科教諭として勤務するかたわら、今年2月にコールアンの一員に迎えていただきました。初めての演奏会で緊張していますが、心から演奏したいと思います。

皆様へのお願い
コール・アンでは、アルト、テノール、バスの団員を複数人募集しています。
ご推薦頂ける方がいらっしゃいましたらご連絡下さい。 連絡先 090-8849-2147（木下）